

# 「三月節句のやさしき行事」

くつらぬき

「三月三日の桃の節句に、くつらぬきと称すること行なわれたり。それは七八才より十ばかりの可愛き娘三人、美しく着飾り夫れ夫れ嫁御、仲人、待女郎になぞらえ、雛祭せる家には何処にても遠慮なく座敷へ上るに、訪われたる家にては、その御客を思うまま馳走して帰すなり。」

（橋本渡川著『母物語』）

江戸時代の古河では「くつらぬき」といって、嫁入りに扮した三人一組の町娘たちが、おひな様を飾っている家ならばどの家でも上がり込んで、ご馳走の接待を受けるといった風習がありました。



永井路子旧宅の雛飾り

えたのでしょ  
う。それならば上がり込んだ子供たちにご馳走まで接待するの  
も、うなづけなくもない。

さきに引用した『母物語』では、こ

なんてずうずうしい、なんて思わないでください。そもそも、祭りは非日常的なもの。かつて日本の神祭りは、神に扮したものが祭りの場に現れ、おめでたい言葉を語るといったことが行われていました。これを言祝ぎとか祝言とかいって、その場に福徳をもたらすと考えられていたのです。神に扮するものは仮装をするのですが、神なんてなかなかお目にかかることはできない。そこで、

のくつらぬきを「誠にやさしき行事なりけらし。但し、これも七十年ばかり以前までの事にて、その後は絶えてなしとかや。」と結んでいます。そういうえば、秋田のなまはげを初め、全国各地で行われているこの無法者がとやわられてしまいそうなこのような風習。福徳をもたらすものとして、どこの家でも暖かく迎えているではないか。日本人ってなんて寛容な。

自分たちがイメージできる神の姿に

古河歴史博物館学芸員 立石尚之